

2024年度
入学試験問題

国 語

2月1日 午後

□ 次の(1)～(10)の——線のカタカナを漢字に直して答えなさい。

- (1) なんでもキヨウにこなす。
- (2) 説明がたりない点をホソクする。
- (3) シンコクななやみをかかえている。
- (4) かれは親コウコウな息子だ。
- (5) 自動車のモケイをプレゼントする。
- (6) 気候がオンダンな地方に住む。
- (7) クラスでギロンする。
- (8) オサナいころの思い出。
- (9) 農家でカイコを飼う。
- (10) よく休んで病気をナオしてください。

受験番号	氏 名

中村中学校

② 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

(設問の都合上、本文を改変、省略したところがあります。)

* 字数指定のある問題については、句読点・記号も字数に数えます。

① 現代は「失敗に厳しすぎる時代」と言えるでしょう。

ひと昔前は「失敗しちやっただけど、自分のまわりの一部のひとにしか気づかれていないし、そのうちすつかり忘れられるだろう」などと気楽に考えていられました。

しかし、いまは違ちがいます。

「過去の不適切な発言」という失敗によって、世間から大バッシングを受け、急ぎよ、二〇二一年夏のオリンピック・パラリンピックの開会式の総合演出の A アーティストや芸人がいたことは記憶きおくに新しいと思います。

失敗に対して、世間があまりにも厳しいという事実は、有名人に限られたことではありません。

たとえ一般いっぱんじん人であっても、軽い気持ちでSNSにのせた写真や発言が、名前も顔もわからない匿名とくめいの大勢のひ

「だったら、やっぱり失敗学は失敗しなすむために必要な学問なんじゃない？」と思うかもしれません。

残念ながら、その考え方は間違いだと言わざるを得ません。

理由は二つあります。

一つは、日頃ひごろからどんなに用心深く行動しても、あるいは、どれほど失敗学を身につけたとしても、それでも「失敗」というものは必ず起こるからです。

あなたのまわりのひとたちのなかに「絶対に失敗しないひと」はいるでしょうか。どんなに完璧かんぺきなひとに見えても、生まれてからこれまでの人生のなかで「私は一度も失敗したことがない」と断言できるひとはいないと思います。

十数年前まで、原子力発電に関わる機関の発表資料等では「原子力発電は絶対に安全な発電技術」とされてきました。言い換かえれば「原子力発電事業は絶対に失敗しない」と信じられていたのです。

しかし、二〇一一年三月に起こった東日本大震災だいしんさいで、

② とたちからの批判や誹謗中傷ひまうの対象となつてしまい、人格否定にまで至る大失敗となつてしまえばかりか、「デジ

タル・タトゥー(ネット上から消せない傷跡きずあと)」となつて、延々と苦しめられるケースも珍めずらしくありません。

タレントや著名人ではなくても、私たちの誰だれもが「もし失敗したら、見知らぬ大勢のひとたちからネット上で袋叩ふくろたたきにあうかもしれない」と怯おびえてすごさなければならぬ時代に生きています。

そんな息苦しい今だからこそ、私が発案し、研究を続けてきた「失敗学」の必要性が増しているのです。

ただ、よく誤解されることがあるので、ここであえて言っておきます。

失敗学は「失敗しないための学問」ではありません。失敗学は「創造的(クリエイティブ)に生きるための哲てつ学がく」です。

たしかに、失敗学を学んだひとは、学ばないひとよりも、失敗する可能性を低くすることができますでしょう。

私たち日本人を含めた世界中のひとびとが悲惨ひきんな原発事故という「取り返しのつかない失敗」を目の当たりにして以降、そんな「安全神話」^④は完全に消え失うせました。

どんなに注意しても、どれほどたくさん知識ちかを蓄たくわえても、失敗を完全に防ぐことはできない——つまり、失敗

学の目標は「絶対に失敗しないこと」ではないのです。

もう一つの理由は、もし「失敗学を身につけて、とにかく失敗しないように」とばかり考えて、失敗に怯おびえながら過ごしていたら、成功する機会も、成長するチャンスも失つてしまい、人生がとてつまらないものになってしまうからです。

失敗は必ず起こってしまうのですから、「絶対に失敗しないように」などというムダな考え方は捨てて、つい失敗してしまつたら、気持ちを切り替かえて「絶好のチャンス!」と考え、「なぜ失敗したのか」「この失敗からどんなことが学べるのか」を徹底的てつていてきに分析ぶんせき・整理して、その後の自分の人生の糧かてにする知識やノウハウをきちんと身につけることが大切なのです。

その「分析・整理」や「糧にすること」の具体的な方法を学んで身につけるのが「失敗学」の目標です。

つまり、取り返しのつかないような大失敗ではなく、後からリカバーできるような失敗であれば、恐れることなく、「チャンスだと思ったら果敢にチャレンジできる自分」になるための哲学なのです。

ここまで説明してきた二つの理由から、「失敗学は失敗しないための学問ではない」となるわけです。

では、「失敗学を学ぶことによつて得られるメリット」とはなんでしょうか。

まずは「自分の経験した失敗から正しく学ぶ方法身につけることで、取り返しのつかないような大失敗の起こる可能性を下げられる」ということです。

しかし、その先には、もっと大きなメリットがあります。

大きな失敗が起きる可能性を下げ、小さな失敗を必要以上に恐れないですむようになれば、本当は「成功するかどうかわからないけれど、こんなことをやってみた

いな」と思っていたことにチャレンジできる自信が持てるようになります。

しかも、失敗学で会得した「自分の経験した失敗から正しく学ぶ方法」を発展させると、「思いついたアイデアを実現する方法」にも応用できます。すなわち「失敗学を身につければクリエイティブな生き方ができるようになる」のです。

それは「創造学」とでも呼ぶべき新たな哲学と言えます。

これが、もう一つの「失敗学を学ぶことによつて得られるメリット」です。

(畑村洋太郎『やらかした時にどうするか』筑摩書房)

問一 —— 線①とありますが、現代において厳しくなったのは何ですか。本文中から二字でぬき出して答えなさい。

問二 A に入る言葉として最も適当なものを次から

一つ選び、記号で答えなさい。

ア、幕が下ろされた

イ、舞台に立たされた

ウ、座から外された

エ、大役をになつた

問四 —— 線③とはどのような学問ですか。本文中の

言葉を用いて二十五字以上三十字以内で答えなさい。

問五 —— 線④「安全神話」の内容を具体的に二十五

字以内で答えなさい。

問六 —— 線⑤とありますが、失敗してしまった時に、

その失敗とどう向き合っていくべきだと筆者は述べていますか。本文中の言葉を用いて答えなさい。

問三 —— 線②とありますが、これを簡潔に言い換えた言葉を本文中からぬき出して、解答らんに合う形で答えなさい。

問七 ―― 線⑥「二つの理由」を簡潔にまとめた文として適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア、失敗は必ずしも起きるとは限らないが、それをチャンスととらえるかどうかはあなた次第しだいだから。
- イ、失敗は完全には避けられないものであるので、絶対に失敗しないようにと考えるのはむだだから。
- ウ、失敗は必ず防げるものなので、そのためにも日頃から失敗を恐れてほしくないから。
- エ、失敗は防げるものではなく、むしろそれに怯えず成長するチャンスをつかむものだから。

問八 ―― 線⑦「もっと大きなメリット」があらわれている例として適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア、大事な試合に寝坊ねぼうして遅刻ちこくしてしまったので、目覚まし時計をセットして早く寝る習慣がついた。
- イ、少しこわいけれど転んでもすりむくぐらいだから、一輪車に乗ってみようという気になった。
- ウ、逆上がりが上手にできないので、上手な人を見て勉強しようと考えた。
- エ、テストの結果が悪かったので今日は家でテストの話をしないうにしようと思った。

問九 本文の持ちようとして当てはまらないものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア、段落を短めにして読者がテンポよく読めるように工夫くふうしている。
- イ、必要に応じて失敗の具体例を入れて読者がイメージしやすいようにしている。
- ウ、失敗学を学ぶことによるメリットとデメリットをきちんと説明している。
- エ、かぎかつことをたくさん用いて大事などころをわかりやすくしている。

問十 あなたが過去に失敗した例を一つ上げ、その失敗から学んだことを書きなさい。さらに、その経験は今後どのようなことに生きてくると思いますか。あなたの考えを書きなさい。

Ⅲ 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

(設問の都合上、本文を改変、省略したところがあります。)

*字数指定のある問題については、句読点・記号も字数に数えます。

札幌さっぽろに住む小学六年生の「大介だいすけ」は、人から流れ出る気配や感情を「色」として見るができる。夏休みのある日、両親とけんかをして家出をした「大介」は、ひよんなことから隣となりの家に住む老人、「北海ほっかい」の旅に同行させてもらうことになる。現在は、旅のどちゆうで知り合った「高村たかむら」という男性が運転するトラックに名古屋から大阪まで乗せてもらっているところである。

高村はまたラジオの『与作よさく』と合わせてこぶしを回している。北海は上野駅の売店で買った時刻表を取り出して、横でパラパラとめくりはじめた。大介がそんなことをした

いる。高村はいろんな歌を知っているようだ。

ハンドルを軽く **A** ながら、彼は楽しそうに見えた。楽しいのだろうか。大介は父の言葉を頭はんすうの中で反芻はんすうして、考え込む。父の主張が正しいならば、高村は今こうしてトラックを運転している現状を、好ましいものではないと捉とらえていなくてはいけない。なのに、全然そういう感じではない。

ふうと吐はいたたばこの煙けむりが、窓の外の風にまぎれて **B** ていく。

「高村さん」
「おう、なんだ？」
「高村さんは、子どものころからトラックの運転手になりたかったの？」
「いや、特になんとも思っ
てなかったなあ」
「じゃあ、なんでなったの？」

大介の左横で北海が鼻から息を抜ぬく。「そうだな、おまえはこの間おこも怒おこられていたもんなあ」

あの父の **I** が、隣家りんかの北海にも聞こえていたのだ。

ら、酔よい止め薬の効果もどこかへ飛んでいって、きつと胸がむかむかする。

「北海お祖父じいさんは乗り物に強いんだね」
前方に視線を固定したままでそう言った。北海の教えを守っているのだ。

「おまえよりは強いな」
どこかしら不機嫌ふきげんそうな声だった。つい顔を見ようとしたら、「前を向いている」と言われた。内心首を傾かしげた
が、気分を害するようなことをした覚えはない。大介は
乗り物酔いに話題を戻もどした。

「昔からそうだったの？ 僕ぼくくらいの歳としのころから？」
「大介。大人になったら酔わなくなるっていう人もいっぱいいるぞ」高村がそう励はげましてくれた。「俺おれもガキのころはそんなに強くなかった」

高村はサーブエリアでハイライト※を一カートン買ってきていた。彼のたばこを吸うスピードは速かった。たばこを吸わないときは、ラジオと一緒いっしょに歌を口ずさんで

夏場で窓を開けていたせいだ。

高村が「大介が怒られたのと俺がトラック運転しているのが、なんか関係あるのか？」と訊きいた。

大介は口をつぐんだ。関係を説明するには、父がどんなことを言っ
て怒ったのかを話さなければいけない。高村が聞けば気を悪くするだろう。

けれども高村は陽気に、「なんだよ、言えよ。教えてくれよ」と大介を **C** た。

困った、どうすればいいだろう。
助けを求めるように左横に目を動かしても、北海は反応してくれない。しつこい高村に根負けして、大介は腹を決めた。

「僕の成績が悪いと、お父さんは怒るんだけど、怒り方がいつも同じで、言うことも一緒なんだ」
「親は怒るよなあ。俺も良くなかったから覚えがあるぜ。で？」

「こんなんじや、いい大学に行つていい会社に入れない。おまえは将来工場のねじまきや……」大介はポケットに

手を入れて、中のナイフに触れる。「トラック運転手になりたいのか、って」

ああ、やっぱり言わなければよかった。怒りにまかせて、高村の右足が急にアクセルをベタ踏みしたらどうしようか。運転が荒くなったら、きつと酔ってしまふ。そればかりか事故になったら。大介はやっぱり何と言われでも黙っておくべきだったと、激しく後悔しながらハンドルを握る右手を見た。

池田昭三の空き家の前で北海を取り囲んだのと同じ紅蓮が、高村の指から迸り出た——大介は見た、確かに一瞬その色を。

なのに高村は、まるで気にする様子もなく笑い飛ばしたのだった。

「そうか、大介の父ちゃんはそんなことを言うのか」

笑い声が、目にしたはずの紅蓮を幻にする。大介は混乱した。高村は短くなったハイライトを灰皿で潰し、片手でハンドルを操作しながらもう一本に火をつけた。

「父ちゃん、なにしてんだ？」

「性に合わねえってやつかな。小難しいことはわかんねえけどさ」

顎をしゃくるようにして、高村はフロントに置いてあるハイライトの一箱を示してみせた。

「大介、おまえ、このたばこ一つ、いくらするか知ってるか？」

大介は近所のたばこ屋の店先を、記憶の海から引き揚げる。あそこに値段は書いてあったか？ あるいは自動販売機の表示は。

「百円くらい？」

「今年の四月に百五十円になったよ。三十円値上げしやがった」

「三十円なら大したことないね」
遠足のおやつを買うとき、きつちり上限の三百円まで使い切るには、ある種の工夫が必要だ。食べたいおやつだけでは、どうしてもちようどにはならない。そんなとき、五円や十円の小さなチョコレートやキャンディ、ガムを見繕う。大介にとって三十円とは、メインのおやつ

なにしてんだは、この場合、仕事のことには違いない。

大介は混乱から来る動揺を自らの意思で鎮めようと試みながら、父が勤める保険会社の名前を言った。

「おー、すげえでかい会社だなあ。そりゃあ周りからはいい会社に勤めてるなって言われるし、給料もいっぱいもらえんだろう、俺よりは」

父の給料がどれくらいなのか、大介には見当もつかなかったが、少なくともはずだった。お小遣いやお年玉の額は、漏れ聞こえてくる級友たちのものより多かった。父も工場作業員や運転手より聞こえが良く、稼いでいる自信があるから、侮蔑的なことも平気で口にするのだ。改めてそんな父に反発を覚えていたら、高村がハイライトの煙とともに言葉を吐き出した。

「でも俺は、こいつで走るんでいいなあ。もしよ、おまえの父ちゃんの会社に入れてくれるって言われても、断つちゃうな」

ラジオから流れてくる楽しいな流行歌を、共に口ずさむように。

とおやつの隙間を、そういつた駄菓子で埋める金額だ。

しかし高村は、「大介は三十円稼いだことがあるか？」とにやりとした。

「二千円くらい入っていた財布を拾って届けて、半年後に僕のものになったことならある」

「拾うんじゃないよ、自分の体使って、汗水たらして三十円稼いだことはあるかって」

あるわけがない。小学生なのだ。

とはいえ、「小学生だからそんな経験はない」と言い返すのは、ためらわれた。自ら「僕は子どもです」と主張しているようだからだ。

高村だってそれをわかって訊いている。その証拠に、口を閉ざした大介を見てさらに満面の笑みを浮かべ、ハイライトをいったん灰皿に置くと、大きな手で帽子ごと大介の頭を乱暴に撫でた。

「じゃあよ、おまえちよつと仕事してみろ」

大介は目を見開いた。

「仕事？ なんの？」

助け舟が出ないかと北海に目で訴えるも、北海も先ほどの不機嫌そうな様子はどこへやら、高村と一緒になつてにやにやしている。

130

「俺、一応大介たちが座るところとかをよ、今日出発する前にきれいにしたんだ。でもすごくびかびかっつてわけじゃねえだろ。だからよ、その物入れに布きれあるからよ、それで前のほうとか拭いてくれねえかな。あと、灰皿にも吸殻がたまつてきているだろ。きちんと火が消えて冷たくなつてるか確認してから、ビニール袋にあげて、俺とじいさんが気持ちよく使えるようにしてくれねえかな」

135

言ったそばから高村は、吸つていたたばこを灰皿に押しつけて中身を増やした。

140

「じいさん、一本どうぞ」

「おう、いただくよ」

「後ろはよ、俺の釣竿あるから、そのままでもいいからさ。

前な、前の、大介とじいさんが座つてる周り」

145

そうして大介の両隣で二人ともまた吸いはじめる。

んでこんなことをさせられているんだらうという不条理感を抱きながら、気のいいはずの人使いの荒いあんちゃんと言つておりにした。

165

最後にたまつた吸殻の一つ一つにちゃんと触れ、火はもちろん、熱も冷めていることを確認してから、ビニール袋に灰皿の中身を移した。袋のほうはきつちりと口を結び、空になった灰皿を元あつたところに収めた。

170

「終わったよ」

「おう、ご苦労さん。その吸殻が入った袋、こつちによこせ」

175

高村はシートの下からパイナップルの缶を取り出した。缶は空のようだった。ビニール袋は缶の中に押し込まれた。

「じゃあ、給料だ」

高村は握つた左手を押し付けてきた。思わず両手で受け止める恰好を取ると、彼の手は開かれた。

180

十円玉が三枚、大介の手の中に落ちてきた。

「きれいに掃除してくれてありがとうな」

明らかに灰皿を満杯にしてやろうという魂胆だ。大介は文句を言いたくなくなったが、悔しいことに北海はたばこを吸っているから高村の味方だ。仕方なく言われた物入れを開けて、薄いタオルのような布を取り出した。それを折りたたみ、面を替えながら、手の届く範囲をこしこしと拭く。席に座ったままでは無理だったので、大介は腰を浮かせた。トラックはほとんど揺れず、滑らかに走行したので、よろけることはなかった。北海も大介のジー

150

ズのを、ぎゅつと掴んでいてくれた。おおむね片づけられているように見えた助手席近辺だが、いざ拭いてみると布はみるみる黒ずんだ。シートが、たばこを包装していたビニールが落ちていたりもした。「窓を開けるし、たばこも吸うから、どうしても汚れるのさ」

155

高村は横で忙しく動く大介を上手く避けつつ運転しながら、悪びれずにそんな言い訳をする。高村が三本、北海が二本ハイライトを短くする間、大介は酔うかもしれないということすら忘れ、かわりにな

160

いろいろな人間の手を経てきたのだから、くすんだ茶色の硬貨をどう取り扱うべきか、大介は少し困った。たった三十円、特段嬉しくはない。一方でこんなお金はいらないと突っ返す気にもならない。「どうして金がもらえたかわかるか？」

185

北海だった。大介は老人と目を合わせた。彼は時刻表のとあるページを開いたまま膝の上に伏せ、左腕を開け放した窓にかけて頬杖をつきながら、右の人差し指で硬貨を一つずつ突いた。

190

「こいつの分、あんちゃんの II からだよ」

北海は高村にバトンを渡す。「なあ、あんちゃん」

「そうだ。大介は俺の II だ。だからありがとうな、で三十円だ」高村はまた、大介の頭に左手をやった。

195

「俺はおまえの父ちゃんほど頭も稼ぎもよくねえけどよ。これだけはわかるぜ。もし俺がここでトラック放り出して、あれだ、後ろの釣竿持つて海にでも行つたらよ、大阪で積荷のうなぎを待つてる誰かが困るんだ」

「困る？」

200

「そだよ。仕事するのはそういうもんだと俺は思ってるぜ。大きな会社ですげえ仕事をしているおまえの父ちゃんも、おまえの父ちゃんからしたら小馬鹿にしないような俺も、今こころをきれいにした大介も、根っこは同じだ。おまえ、犬のクソをくれたやつにありがとうって金を払うか？」

「払わない」

「だろ？ 仕事はその逆さ。仕事はよ、どんなにつまなく見えても、どつかで誰かの役に立っているのさ。ありがどうって思われている。だから金がもらえるんだ」

③ 手のひらの三十円が、少し重さを増したように感じられ、大介はそれをじっと見つめた。

「次のサービエリアでも、大阪に着いてからでもいいさ。大介おまえ、その三十円でなんか買ってみろよ。三十円で買えるもんなら、買えるはずだ」

「小さなチョコとか、ガムとか？」

「そうさ。そいつは三十円。誰が持っていようと、三十円の価値がある」

この世の中には大勢の人がいろんなことをしてお金を稼いでいる。仕事をしている。

誰かに求められて、誰かの役に立っている。

いつもよりずっと早起きをして乗せてもらったこのトラックを、高村は「今日はゆつくりの出発さ」と言った。

深夜から午前三時、四時のほうがトラックは多いと。普段なら大介はもちろん大介の父も、まだ眠っている時間だ。

その時間に、トラックの運転手は働いていた。

働いているすべての人が、大介には手の届かない

に思えた。そして生まれてから今までの十二年間で一番身に染みて、自分は Y だと痛感した。

高村は次のサービエリアに寄ってくれた。大介は売店で小さなチョコレートと飴玉を三十円分買った。それらは全部食べてしまったが包装紙は捨てられなかった。

大介はそれを大事に財布の中の一万円札と一緒にした。

大介は顔を上げ高村を見た。高村はまだ続けた。

「大きい保険会社で働いてもらう大介の父ちゃんの一万円札とよ、トラックを運転してもらおう俺の一万円札をよ、比べてみろよ。俺が持っているからって半額にはならねえし、おまえの父ちゃんが持っているからって十万円に増えるわけもねえ」高村は新しく火をつけたハイライトを、うまそうに吸う。「真つ当に働いて稼いだ金なら、誰が持っていようが価値は平等だと俺は思うよ。だから、なにがいても悪いもねえよ」

少ししゃべりすぎたなあど照れくさそうにする高村の横顔を見つめながら、大介は彼が言った言葉すべてを頭に刻もうとした。この旅が終わって家に帰り、怒られる場面になって、父がまだあの決まり文句を投げかけてきたら、高村が言ったとおりのことを返してみたいと思つた。

それに対する父の反応も知りたい、とも。

大介は手の中の三十円を、力を込めて握りしめた。手が臭くなるなんてことはどうでも良かった。

※与作……歌謡曲のタイトル。

※ハイライト……たばこの銘柄の一つ。

※一カートン……たばこ一〇箱をひとまとめに紙箱につめたもの。

※紅蓮……真つ赤な蓮の花。燃えさかる炎の色にたとえられる。

※侮蔑的……見下して、ばかにする様子。

問一 A C に入る言葉を次からそれぞれ一つずつ選び、ふさわしい形に直して答えなさい。

はじく さばく せつつく たなびく

問二 ―― 線①とありますが、なぜですか。その理由として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、乗り物酔いをする大介から見ると、毎日トラックを運転するのはとても大変に見えるから。

イ、大介の父は、自ら好んでトラック運転手になる人などいるはずないと信じているから。

ウ、トラックの運転手は、多くの人が寝ている深夜や早朝などにも働かなくてはならないから。

エ、トラックの運転手は成績が悪い人が仕方なくやるような仕事だと、父が言っていたから。

問四 ―― 線②とありますが、なぜですか。その理由を二十五字以内で答えなさい。

問五 二か所ある Ⅱ には同じ五字の言葉が入ります。共通して入る言葉を考え、本文中の語を用いて答えなさい。

問三 Ⅰ には、頭ごなしにどなりつけることをある自然現象を用いて比喩的に表す語が入ります。ふさわしい言葉をひらがな四字で答えなさい。

問六 ―― 線③とありますが、そう感じる前、大介は「三十円」をどのようなものだと思っていましたか。それがわかる部分を本文中から二か所探し、「もの」に続くように、それぞれ十字以内でぬき出しなさい。

問七 ―― 線④とありますが、「決まり文句」の具体的な内容を、本文中の語句を用いて六十字以内でまとめなさい。

問十 ―― 線⑥とありますが、なぜ大介は「包装紙」をそのようにしたのだと考えられますか。三十字以内で答えなさい。

問八 ―― 線⑤とありますが、「大介」はどのような言葉をお父さんに返すとあなたは思いますか。セリフを考えて答えなさい。

問九 X、Y には、対（ついで）になる言葉が入ります。適当な言葉を本文中からそれぞれ一語でぬき出しなさい。